

松本清張初期小説の方法 : 『小説研究十六講』を補助線として

曹, 雅潔

<https://hdl.handle.net/2324/4110573>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (学術), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	曹 雅潔		
論文名	松本清張初期小説の方法—『小説研究十六講』を補助線として—		
論文調査委員	主査	九州大学教授	松本 常彦
	副査	九州大学教授	波瀾 剛
	副査	九州大学准教授	西野 常夫
	副査	ノートルダム清心女子大学教授	綾目 広治
	副査	福岡教育大学教授	久保田裕子

論文審査の結果の要旨

本論文は、松本清張の初期小説の方法について、語り・人物造型・舞台設定を中心に検証した論文である。副題は、清張が参照したと証言している木村毅『小説研究十六講』における、語り・人物造型・舞台設定の記述を分析ツールとして用いたことによる。論文は、序章、本論、終章、参考文献、付記（初出一覧）から成る。本論は、語り・人物造型・舞台設定に応じた三部立てで、各部が二章からなる六章構成である。

序章は、論文の目的、『小説研究十六講』の説明、考察対象、先行研究、本論の概要を記す。

第一部は、『小説研究十六講』の語りとの対比から、「赤いくじ」と「西郷札」の語りの性格を分析している。

第一章は、素材面（慰安婦問題）で注目されてきた「赤いくじ」について、その語りに注目し、語りの性格が『小説研究十六講』の「法廷的配置」の語りを一般小説に広げた事例と指摘する。また、語り手の介入の手法が、現実性の付与や演出として機能すること、さらに、小説からノンフィクションに進出するプロセスにおいて大きく作用したことなどを指摘している。

第二章は、「西郷札」作中の『覚書』の三人称での転記が、語り手の介入を可能とする手法である一方、書かれるはずのない出来事の記述という語り手の破綻を呼び込むことを指摘する。この破綻の分析を通して、権力の裏面を描く志向性の内在を読み取ることで、権力機構への反感という系譜化される問題を炙り出している。

第二部は、『小説研究十六講』の人物造型法との対比から、「或る『小倉日記』伝」と「張込み」の女性表象を分析している。

第三章は、現実のモデルが存在する「或る『小倉日記』伝」の人物造型について、性格設定に比重があったとした上で、そのような人物造型法が、清張の一連の評伝小説とも関係することを指摘している。この改変には、作家の環境や人間関係などの現実の投影があり、それが初期作品における女性表象の制限や限界となることを指摘している。さらに、その視点から中期以降の女性表象との関係という問題を浮上させている。

第四章は、『小説研究十六講』における間接表現法の極端な実践と結びつけつつ「張込み」の主婦像を考察している。「張込み」における主婦の平凡な日常と非日常（犯罪者との密会）との対照の背景には、作品が読まれる一九五〇年代の主婦運動や『婦人公論』誌などのメディアでの主婦言説があるとし、「張込み」の主婦は、束縛された家庭生活からの逃亡の欲求と結局は家庭に回帰するしかない女性像の代表と解釈する。その上で、清張の中期以降の「悪女」表象を考える上でも重要な作品と位置づけている。

第三部は、『小説研究十六講』の舞台背景や風景との対比から、第五章で「湖畔の人」と「火の記憶」について、第六章で「啾々吟」と「恋情」について分析している。

第五章は、清張作品の風景の重要性について、『小説研究十六講』が説く舞台背景と人物との相互媒介的な関係から捉え直す。主人公の移動にともない複数の舞台背景の記述がある「湖畔の人」と「火の記憶」は、時間の面では「視線－風景－記憶」の連鎖と関係し、空間の面では、水と火の表象が異なる舞台を媒介する機能を持つことで、幻影や虚構と強く結びつくと分析する。その上で、こうした舞台や風景の表象は、他の作品でも反復されるとする。こうした分析を通して、清張作品における舞台背景や風景を読解することの意義を改めて確認している。

第六章は、「啾々吟」と「恋情」のプロット上の結びつきを指摘し、その背景に「啾々吟」のタイトルの典拠である王陽明「啾々吟」の受容を想定する。権力に抵抗し失敗に終わる人物を描き続ける清張には、その裏面に王陽明「啾々吟」が表現する人生観への共感があり、両作はそれを物語る作品と評価する。

終章は、本論各章における要点を整理するとともに、全体を通して、初期作品の方法や読解のモデルが、いずれも「点と線」に始まる社会派推理小説を中心とした中期以降の作品とも密接に関係する祖型となっていると結論づける。

本論文は、木村毅『小説研究十六講』との対比により、初期小説の全体像を方法の面から描き出している。また、方法を意識化することで、初期小説の読解についても、新たな知見を加えている。さらに、清張文学の初期から中期後期への展開を考える上でも、初期に潜んでいた可能性の展開として捉えるなど、重要な指摘を多く含んでいる。

以上の論文内容および論文の意義から、委員全員一致で、本論文が地球社会統合科学府の博士学位（学術）論文として十分な水準にあると判断した。